

Title	L.A. ムラトーリの『イタリア年代記(Annali d' Italia)』に関するノート その4 : 中世
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.285-p.316
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79633
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

L.A.ムラトリーの『イタリア年代記 (Annali d'Italia)』 に関するノート その4 —中世—

米 山 喜 晟

Le note sugli “Annali d'Italia” di L.A.Muratori(4)

Yoshiaki YONEYAMA

Nota V Dell'età e dei monarchi carolingi

Cap.I Malgrado l'antipatia verso i franchi che avevano distrutto il regno dei longobardi, Muratori stimò ragionevolmente la gran impresa fatta da Carlomagno. Negli “*Annali d'Italia*”, egli lo laudò sinceramente e riconobbe il buon effetto in Italia della sua conquista. Ma egli tentò di provare la continuità del governo dei longobardi che rimasero come il ceto dirigente sotto il supremo strato dei franchi. Cap.II Poi Muratori tracciò il corso della divisione del potere imperiale e della decadenza della dinastia carolingia nella situazione complicata dalle invasioni dei saraceni, dei normanni, e dei ungheresi ecc.

Nota.VI Dell'età del Regno Italico

Muratori trattò dell'età più oscura e sconosciuta della storia italiana in questa parte e tentò di consolidare la base della conoscenza del tempo e del luogo del potere regio italico, confrontando i documenti che teneva nelle sue mani. Attraverso il suo discorso, possiamo comporre alcune immagini dei monarchi principali di quest'età, come Berengario, Ugo, Berengario II, Otto I e Adelaide ecc.

ノート 5 フランク族支配下のイタリアについて

第一章 シャルルマーニュ評価とフランク族とロンゴバルド族の関係

今回の本ノートは 774 年の Carlomagno (通称シャルルマーニュ、本来はシャルル、死後にラテン語の敬称 magnus が贈られた。ムラトーリは通常 Carlo もしくは Carlo magno と 2 語で記す。今回のノートでは、Carlomagno または Carlo と記す) によるロンゴバルド王国の崩壊以後フランク族が支配した通称カロリング朝時代 (774-887 年) を論じる。ロンゴバルド族の王 Desiderio が、娘二人を Carlomagno と Carlomanno 兄弟と結婚させることによって自分の王権の存続を図ろうとしたフランク族懐柔策が完全に裏目に出て、ロンゴバルド王国はフランク族の領土に併合されてしまうが、世界史によって周知の通り 800 年の Carlomagno の戴冠式とともに復活した西ローマ帝国すなわちこれ以後の神聖ローマ帝国も、その孫の代には分裂し、イタリアは生存中の三人兄弟の長兄である皇帝 Lottario (= Lotario) の領地となる。本節はフランク族の支配確立からその男系の嫡子の子孫の支配が終わるまでの 114 年間について、ムラトーリの叙述をたどりながら、その支配の特徴を考察しておきたい。世界史において脚光を浴びて来た、Carlomagno の戴冠やストラスブールの誓いから、帝国に分裂をもたらしたヴェルダン、メルセンの両条約の締結に至る過程等、我が国においてもくわしく知られている特別重要な事件や時期を除くと、我が国ではこの時代について知られていることが少なく、特にイタリアに関してはその感が強いので、今回のノートもムラトーリの叙述の内容の紹介が中心となる。

参考のため例によって G. Falco と F. Forti による抄本¹⁾を眺めると、p.1179 の Carlomagno 宮廷の革の衣服の流行、衣類の贅沢やヴェネツィア商人の活躍に関する記述から、pp.1202-03 の Carlo il Grosso の弱体化ぶりと、同皇帝が皇后との関係を疑って書記官長を追放したという事件を記した記録までのわずか 10 項目 25 ページ (全 480 ページ中の 5.2 %) に過ぎず、極度に資料が不足していたとされているロンゴバルド族の時代程ではないが、一世紀あまりに対して手簿だという印象は否定し得ない。この時代の問題点を考えるヒントとして先の抄本に収録された残りの 8 項目を示しておく。pp.1180-82、法王 Adriano 一世の賛美および法王 Leone 三世と皇帝 Carlomagno の関係、pp.1182-87、Leone 三世の裁判および Carlomagno の戴冠、pp.1187-89、Carlomagno がエルサレムの聖墓の鍵を受け取る、pp.1189-90、Carlomagno の賛美、pp.1191-92、勅令「朕 Ludovicus」の信憑性の否定、pp.1192-97 皇帝 Lodovico と息子 Lottario 等三兄弟の争い、pp.1197-99、Lodovico 二世の失脚および Lottario 二世の死、pp.1199-1202、回教徒のサレルノ攻略。

ムラトーリ自身の記述に戻ると、今回のノートが扱うのは筆者の利用している 1790 年刊行のヴェネツィア版 (Antonio Curtio Giacomo 刊) 「ムラトーリ作品集²⁾」(MURATORI

OPERE)」第25巻（『イタリア年代記』第10巻）p.224 から同第27巻（『年代記』第12巻）P.99 まで、ページ数で888ページに及ぶ部分である。

すでにこれまでも何度か触れたが、カトリック教会の優等生フランク族に対するムラトーリの評価は、彼がロンゴバルド族に好意を抱いている分だけ概して辛くなっているというのが定説である。この点についてたとえば Bertelli は次のような解説を行っている。

「ムラトーリの『イタリア年代記』におけるこの歴史時代の特徴は、いわばフランク族に対する嫌悪で、それはやがてはっきりとした反フランス的な傾向と変わり、それに対応しているのが神聖ローマ帝国の政策に対するうまく隠されていない好意である。このような嫌悪は、ムラトーリの場合かつてライプニッツに対してそうであったように、二重の源を有している。それは何よりもまず、すでに記した通りアングロ・サクソンの碩学達に一般的に認められる反ノルマン的傾向に類似した反教権主義的動機である。第二にハプスブルグ家の伝統的に反フランス的な政策への追従である。³⁾」

いわばコマッキオ論争以来のムラトーリ自身の歴史家および文献学者としての全形成過程が、こうした Carlomagno 以下のフランク族の評価の基礎を形成しているということになる。基本的に Bertelli のこうした意見は正しいが、そうした傾向的解釈を強調し過ぎることは、ムラトーリのような実証的で柔軟な歴史家を扱う場合危険である。

そこでまずムラトーリがこの時代の最重要人物であった当の Carlomagno 自身をいかに叙述し、評価しているかを眺めてみよう。教会側の歴史において、ロンゴバルド族の横暴からの教会の解放者として英雄扱いされているこの人物について、ムラトーリは「実は我々は Anastasio（年代記作者）を通して、Carlomagno 王がその前年にパヴィーアの攻撃から転じたことと自ら軍隊の一部を率いてヴェローナへと攻め上がったことを知っている。（ロンゴバルド族の王子）Adelgio と共にその地に逃れていた彼の幼い甥達、つまり死んだ弟 Carlomanno の子供たちが、その母親や王子達の有名な家庭教師 Autocario と共に彼の手中に落ちた。その後これらの貴公子達の身の上に何が起こったかについて、歴史は沈黙している。多分それは Carlomagno の不名誉になるような事柄、罪のない甥達への無慈悲さを暴露しないためだろう（V.X,p.225）⁴⁾」とか、「彼はそばに女がいないと過ごせない人だったので、その（王妃 Liutgarde の死）後次々と4人の女を持ったが、彼の伝記作者 Eginardo によって彼女達全員の名前が記録されている。ボラン派修道士達やその他の人々は、この偉大な君主の多くの美德、とりわけ信仰心を考慮して、こうした女達を良心の妻、いわば左手の妻（mogli della mano sinistra）だと認め、許されることだとし、また教会が神聖な結婚の契約についての優れた規定を与えたのは、後年すなわちようやくトレント宗教会議においてのことだから、教会の教えにも反していないとした（V.X,p.374）」といった底意地の悪いコメントの類いも記している。

しかし彼の Carlomagno に対する評価の基本的な立場が以下のごときものであることを忘れては誤解を生むだろう。「(814年に71才で彼が死去したと記した後) 彼をアウグストゥス、ト

ラヌス、マルクス・アウレリウス等の名君に匹敵させようとする人は容易にそうした主張の根拠を見出すことが出来るであろう。しかしある部分で彼は異教徒の英雄的皇帝達よりも優っていたとさえいうことが出来る。何故なら皇帝達はすでに栄え、すでに無限の力を備え、習俗も洗練され、その軍隊はよく訓練され、その政府は賢明な配慮と法律によって統制されたローマの皇帝権を見出したからである。他方 Carlomagno はフランク族つまり彼の支配下にある民族の内に、少なからぬ野蛮さ、度外れた無知、その他無数の混乱を見出した。それにもかかわらず彼は偉大な頭脳と不撓不屈の精励によって、すべてをしっかりと秩序付け、自国民の習俗を洗練させ、統治を始めて以来、自分も苦勞して学んだ学問研究を良き状態に回復させたのだ。彼の素晴らしい才幹の恩恵は、世俗人の間に広がっているだけではなく、その一部はむしろ他よりもまして聖職者の間に、彼が継続的にその意図を表明した改革や良き秩序として普及しているのである。彼の勅令や法律を見たまえ。それらの全てに、英知と敬虔と正義が息づいている。(V.XI, pp.23-24)」

多少調子が良すぎ理想化が過ぎる嫌いはあるが、ここにはまさに君主に対する最高の賛美が見られることを、誰にも否定出来ないであろう。

ところでイタリアにとって、この君主の存在はいかなる意味を持っていたであろうか。実はこの点に関しても、ムラトーリの Carlomagno 評価は筆者自身が前ノートで強調しておいた彼のロンゴバルド族最良の傾向や、先に示した Bertelli の言葉等から予測されるよりもはるかに好意的であることをここで確認しておく必要があるように思われる。

「それはまたイタリアにとって最高の利益になる変化であった。何故なら（これ以前の時代には）ロンゴバルド王の臣民達は、国内的な平安と幸福を楽しみ、よき法律と正確な裁判によって統治されていたのだが、その後精神の高邁さ、権勢、裁判の公平さ等においてフランク族とロンゴバルド族のあらゆる王達に優っている君主である Carlomagno の下で、さらに良き扱いを受けたからである。(V.X, p.234)」

こうした Carlomagno に対する意外に好意的な態度の主要な原因の一つは、ムラトーリがフランク族とロンゴバルド族の関係を、我々がしばしば誤解しがちなように単純な対立関係あるいは征服一被征服の関係としては捉えていないことによるものと思われる。たとえば、Carlomagno によるロンゴバルド王国の征服の事情も、通常の征服とは大いに性質が異なっていたことが、次のように証言されている。「いかなる合戦もなく、8 か月以上しっかり持ったパヴィーアとそれよりも短い期間抵抗したヴェローナを除くと、いかなる都市もいかなる砦も敵対することなく、きわめて容易に、成功裡に行われた Carlomagno によるイタリア王国の征服は、ある人々に奇異の念の動機を与えるかもしれない。ゴート人からそれを奪う際にはこうは行かなかった。しかしガリアのすべてとゲルマーニアの少なからぬ部分の支配者となっている Carlomagno の兵力が大変なもので、人々が抵抗するよりも降伏する方が安全だと判断したということを、念頭におかなければならない (V.X, p.231)」として、かなり平和裡の王権の移行であったことを指摘した後、法王 Adriano 一世やノントラ大修道院院長 Anselmo の工作が、そうした移行を準備す

るのに力があったことを示唆している。特に後者がそうした工作に用いた文書を示した後、「そうした情報は極めて起こり得たらしいと思われる事態を我々に理解させてくれる。それは修道院長 Anselmo が法王と一体となって、彼自身の信用や血縁関係を、Desiderio 王に敵対している、かつてのロンゴバルド王達につながる党派の信用や血縁関係を、Carlomagno のためにこの機会にうまく利用して、多くのロンゴバルド人の心を捉えたということである。事実私が世に出した記録 Paralipomeni において、サレルノの逸名の作者が記しているように、当時少なからぬロンゴバルド人が、フランク人のために自分達の君主に対して蜂起したのであった (V.X, pp. 232-233)」と記している。さらにロンゴバルド族の一部は Carlomagno に使節を送ってイタリア征服をすすめ、協力を約束したとし、フランク族とその配下の軍勢がアルプスを越えた途端に、ロンゴバルド族の軍隊が逃走したのもそうした約束に基づくものだとしている。何となくロンゴバルド族の敗北を認めない、熱烈なロンゴバルド族最良の負け惜しみの言葉のような感じもしないではないが、ムラトリーが本気でそう信じていることは、以下の記述から見て明白である。

「だからロンゴバルド族の王の治世は終わったが、ロンゴバルド族の統治は終わらず、その王の称号を勝利者の Carlomagno が名乗ったのであった。(V.X, pp. 233-234)」

実はこの文章の後に、先に記したイタリアにおける Carlomagno 支配を高く評価した文章が続いているのである。これまでのいくつかの引用は、家父長的絶対主義の信奉者と見なされている⁵⁾ムラトリーの物の見方を明らかに示しているが、同時にフランク族のイタリア支配についてのムラトリーの見解を端的に表現したものとして重要である。とりわけムラトリーが、両王権の実質的な連続性について大胆な断定を行っている点が興味深く思われる。すなわち彼の見解によるとこの時たしかに王権は交代し、またそれまでの公による支配が伯による支配に変わる等一応最上層部における交替は行われたが、そのすぐ下のレベルではロンゴバルド族の支配が温存されたと見なされているわけである。しかも Carlomagno の征服後間もなく、一応独立したイタリア王の称号も復活して Carlomagno の息子 Pippino が任命され、パヴィーアの宮廷も再建されている。こうしたムラトリーによるフランク族の支配形態のイメージが、果たしてどこまで真実に近いのかは、疑問の余地が大いにあるように思われるが、少なくとも膨大な資料を直接手に取って判断した碩学の見解として無視し難いものであることは確実である。たとえば南イタリアのかなりの部分を占めているベネヴェント公領は、フランク族の支配に直接組み込まれることなく、一応独立して存続し続けている。Carlomagno はそれほど遠くない都市であるローマに頻繁に出入りしているので、後代はともかくこの時代のフランク族にとって、この領土を占領することはそれほど困難ではなかったように思われるが、一時的な支配は生じても完全に併合するには至らなかったようである。確かにたとえばフランク族と法王庁との関係⁶⁾等、いろいろと事情はあるとしても、こうした曖昧さにも、ムラトリーが指摘したフランク族とロンゴバルド族の関係の微妙さが反映していると見なし得るであろう。

第二章 カロリング朝の君主達

すでに Carlomagno とそのイタリア人支配に触れたので、引き続いてそれ以後のフランク族の君主達についてのムラトーリの人物評価を以下で瞥見しておくことにしよう。

840年にこの Carlomagno の唯一の相続人 Lodovico (Ludovico とも記す) il Pio 帝が死んだ際、ムラトーリは以下のように評価する。

「ついに司祭達が祈る中で、この上ない謙遜と改悛の内に、この年およそ64才で彼は他界した。(中略) 彼は聖なる宗教と教会の教えへの卓越した愛と熱意のため、正義への配慮のため、そして敵意における一貫性、貧民や正式の俗人や聖職者階層への気前の良さ等のため、栄光に満ちた君主であり、まさにその通称「敬虔帝 (il Pio)」の名に正当に価している、寛容さ、優しさ、その他の美德において並ぶ者なき君主であった。ところが最初の結婚から得た子供たちに関しては、彼は奇妙に不運であり、全員がかくも善良なる父親に対して恩知らずであった。そして二番目の妻と彼女から生まれた末っ子とをあまりにも可愛がる父に対して、彼らは多くの事件を企てた。このことから多くの紛争が生じたが、そのことはすでに記した。(V.XI,p.206)」

ムラトーリは「奇妙に (stranamente)」と記しているが、実際にはさほど不思議がっているとは到底思えない。何故なら彼自身エステ家という古い家柄の君主に仕えて、同家の歴史⁷⁾を記述した際に、こうした類いの様々な相続問題を見て来たからである。洋の東西を問わず、「修身済家治国平天下」という『大学』の有名な言葉が、今日よりもはるかに有効性を発揮した時代が過去に存在していた。世襲的君主制の下では事情に大差はなかったのである。たとえ君主の家といえども、たとえば Carlomagno がその死の間際に、神への恐れを養い、聖職者を敬い、人民を愛し、良き大臣を選べ等々の敬虔な父親らしい言葉を告げた後、当時存命中の唯一の男子 Lodovico il Pio の頭に王冠をかぶせたという逸話 (V.XI,p.17) から分かる通り、彼らの間では十分人間的な情念が生きていた。それゆえかえって激しい骨肉の争いが展開されることになる。Carlomagno には正嫡の男子が4人生まれたが、新皇帝の兄3人は父の死ぬ前に死去していた。その一人 Pippino はイタリア王としてパヴィーアに着任していたが、810年死去して、その子 Bernardo がその地位を継いでいた。しかし彼は817年叔父の皇帝に対して反逆を企てた罪で告発され、ブルゴーニュのシャロンで謝罪したが捕えられ、一味が自白したため翌年 Bernardo は両眼をえぐり取られその傷で死去した。その子孫はその後フランスの公爵として生き延びたが、こうした事件が生じた背景には、Lodovico 帝の先妻 Ermengarda がイタリアを義兄の息子から奪って自分の息子の一人に与えたいと望んでいたという事情があったとされ、ムラトーリもその説に同意している (V.XI,p.60 e 64)。あたかも天罰のようにこの年 Ermengarda が死去、翌819年、皇帝は「希な美女」と伝えられる Baviera (バイエルン) 公 Welfus (ムラトーリはこの人物がエステ家の親戚のヴェルフェン家とつながりがあるとする) の娘 Giuditta と再婚し、彼女が生んだ皇帝の末子 Carlo の相続権をめぐる、皇帝父子および子供の兄弟の間でこの後長

期にわたる紛争が生じることになった。

819年皇帝の長子 Lottario (今日では通常 Lotario、ロタール) は父の同僚皇帝に就任、翌年にはイタリア王となり、Alamagna 公 Eticone の子孫 Ermengarda (母と同名) と結婚。822 年にはパヴィーアに赴きイタリアを統治した。この当時殺人事件が起こるなど、大いに乱れていた法王庁の再建に乗り出す。824 年には Lottario の名で、以下の 9 項目の布告が出された。1. 皇帝と法王の与えた特権の尊重。2. 盗みの禁止。3. 法王選挙の妨害禁止。4. 判事の決定その他ローマの出来事を皇帝使節に報告する義務あり。5. 裁判の際各自がいかなる法 (たとえばロンゴバルド法) で裁かれるべきか、元老院とポポロが早急に決めること。6. 前法王からもらったとする領地を、豪族は返還すべし。7. ローマ人 (法王領の住民) はイタリア王国の領地を奪ってはならない。8. 自分がローマ滞在中、ローマのあらゆる公、判事、役人が出頭すべきこと。9. 全ての者は法王を敬うべし。⁸⁾以上の布告からもこの時期の法王権の威信の失墜ぶりが分かるはずである。

恐らくこの当時のヨーロッパの君主が抱えていた最大の課題とは、当時地中海の制海権をほとんど制圧しつつあった回教徒の攻撃から、いかにその領土を守るか、ということだっただろう。事実スペインにおける Carlomagno の回教徒との戦いぶりは、『ローランの歌』として今日も読まれている。ムラトリーは 828 年 (今日の定説⁹⁾では 827 年) から、回教徒のシチリア侵入を記録していて、832 年 (これも今日の定説では 831 年とされるが) には早くも、「これと同じ時期、キリスト教世界とイタリアは泣くことになる。なぜなら『アラブ年代記』によると、回教徒達はパレルモ市を力づくで征服し、その結果シチリアの最大かつ最良の地域を彼らのくびきの下に置いたからだ。(中略) パレルモ市民全員が奴隷とされた。この市の司教に選ばれた Luca とギリシャ皇帝の Spatario (知事らしい) の Simone 他わずかの者達だけがその後釈放された (V.XI,p.156)」と伝えている。

しかし回教徒の侵入を受けたシチリアをはじめイタリア半島南部の大半が、東ローマ帝国の領土であったためか、Lodovico と Lottario 親子の反応は意外に鈍いようである。そうした危機などそっちのけにして、皇后 Giuditta をめぐる紛争に大わらわという感が否めない。こうした点にも後世の観念に基づく歴史と、当時の人々の感覚とのずれが認められるように思われる。たとえば 830 年、当時皇帝の宮廷で権勢を振っていた Settimania 公の Bernardo と皇后 Giuditta との間に不倫な関係があるという告発が行われ、神明裁判をも含めた騒ぎが起こるが、皇后は許されて Bernardo 派の追放と処罰で事件は終わったと記録されている (V.XI,pp.145-151)。多分に作り話めいて無意味な騒ぎのようだが、同時代人にとっては重大事件であったらしい。その後も父の皇帝と長兄との争いに、次男 Pippino、三男 Lodovico が加わり、双方についたり離れたりしながら、838 年の次男の死、さらに父の皇帝の死 (840 年) を経た後でさえ、その争いは続いている。その底流にあるのは言うまでもなく、皇帝の遺産の領土争いであった。

「すでに述べたとおり皇后 Giuditta のあらゆる努力は、息子 Carlo の為に遺産として国土の

豊かな部分を獲得するためであった。実際この年(837年)、夫によって息子にネウストリア、つまり国土の広大極まる部分を指定させることに成功した。Nitardo(中略)によってその都市がすべて列挙されている。その中には、パリも含まれていた。(V.XI,p.184)」

こうした処置は当然長兄等を怒らせ、この年にまだ14才だったとされるCarloにはこの領地を確保することはすこぶる困難に見えるが、父は末子のCarlo(シャルル)を異常に可愛がり、翌838年の次男Pippinoの死後も、その遺産を孫から取り上げてCarloに与えるため出兵する程であった。

こうした成り行きから、Lodovico帝の死後の戦争は必至となる。Lottarioは840年父の死後間もなく、末弟の誓約を無視してその領地に侵入するが、ロワール川の地点から引き返す。父がCarloに与えた領地の忠実な家来達は特に士気が高く、何とか17才の君主を支えきった。しかしこの時Lottarioはパリまでを含めたフランス東部の広大な領地を一時的に占拠している。ところが翌841年には、簡単にCarlo領を奪回した自信過剰のためか、さらにLottarioはこれまでも時折衝突したことがある実の弟Lodovico(ルードヴィッヒ)討伐のため、無謀にもライン川を越えて出兵した。この機会に、Carloは次兄のため大軍をひきいて出兵し、Lodovicoと同盟し、紆余曲折の後841年6月25日、同盟軍の勢力は数の上では皇帝Lottarioのそれよりもはるかに劣っていたけれども、Fontenoy(ベルギー)で決戦を挑む。圧倒的に有利だとされていたにもかかわらず、イタリアを本拠にしている内に軍隊が軟弱化していたためか、または前皇帝が最愛の末子に自軍の精鋭の拠点を与えていたためか、Lottarioの軍隊は弟達の同盟軍に敗北してしまう。(p.216)ただし『メッツ年代記』によると、この時フランス人(恐らくフランク族と同義)の精鋭が大量に死に絶え、以後フランスは他国を攻撃するどころか、自国の防衛もままならぬ程に弱体化したとされる。(p.216)弱いイタリアを見慣れている我々には必ずしもぴんと来ないが、おそらくこれは従来の精強なフランク族と比較した場合の話で、これ以後フランク族が他の諸民族に対する武力の圧倒的優位を失って諸民族の独立が進んだこと、さらにフランスとその周辺一帯にノルマン人やハンガリア人等の侵入を許したことを意味しているのであろう。こうして苦戦の末戦いには勝ったが、長兄の圧力はまだまだ侮り難かった。そこで弟達は結束した。

「両軍の間では様々な動きが続くが、それらはNitardoによって詳細に記録されている。中でもそこで好ましく読めるのは、Argentinaもしくはむしろストラスブールでと言いたいが、LodovicoとCarloの兄弟の間で定められた同盟の確認である。一人(Carlo)は(筆者注：主にドイツに住んでいる相手の家来達に理解出来るよう)ドイツ語で、もう一人(Lodovico)は、それ以後フランスの俗語となり、今日よりも我がイタリア語にも一層近かったロマンス語(Lingua romanza)で誓った。当時それがどんな状態であったかを知るため、イタリア語でも同様の断片が残っていてほしいものだが、当時のそうしたたぐいのものは、全然残っていない(V.XI,p.221)」とムラトリーは仏、独両語と比較してイタリアの記録の遅れを残念がる。周知

のとおりこの有名な842年のストラスプールの誓いの結果、翌843年ヴェルダン条約が成立し、今はなき父の領地が、ほぼ今日の独、仏、およびLottarioの領地に分割される。こうした分割はフランクの軍事力を低下させ、早くも同年にノルマン人が侵入してフランスを荒らし回った。

ヴェルダン条約成立後、かつてあれほど父や弟達と激しく精力的に戦ったLottarioが、一種の虚脱状態にでも陥ったように見える。何故なら844年、父の同僚皇帝ではなく、単独の皇帝として法王Sergio IIの協力を得てローマで戴冠式を挙行し、長子Lodovico IIをイタリア王に任命した後には、855年に死去するまでほとんど歴史の表面に登場しなくなってしまうからである。一体彼は何をしていたのだろう。853年の項で、ムラトリーはその疑問に答えている。「その後我々は前述の年代記類から、ローマ人（筆者注：ほぼイタリアの人民と同じ）達が、モーロ人すなわち回教徒にひどい目に合わされ、Lottarioが良き君主としての義務を忘れ、彼らの防衛のために全然配慮しないのを見て、彼に対する遺憾の声を放っていることを知る。だがLottarioは神をも忘れて、もっぱら狩りと快楽に溺れていたのだ。亡き妻Hermengarda（ママ）の死後、彼は二人の百姓娘を召し使いまたは奴隷として使役し、二人の内の一人はCarlomannoと呼ばれる彼の息子を生んでいる。（V.XI,p.286）」

こうして皇帝が趣味と快楽に耽っている間も、すでにシチリアやその他の島々の主要部を支配していた回教徒は、容赦なくイタリア半島南部やフランスの南海岸を襲い続ける。そしてカラブリア、プーリア等でいくつかの拠点を築くのに成功する。ムラトリーは回教徒との戦争を、いかなる疑問の余地もない善行だと認めていて、露骨な敵意を隠さない。ところが当時の南イタリアの指導者の間では必ずしもそうしたコンセンサスは成立していなかったらしく、842（今日の説では840）年の項に、ベネヴェント領主Radelgisoが、敵対しているライヴァルのサレルノ領主Siconolfoに領内の都市を奪われないうえ、当時カラブリアに侵入していた回教徒の援軍を招いたと記されている。このためプーリアの最も富裕な都市バーリが奪われることとなった。「バーリの知事Pandoneは、彼（Radelgiso）から市外の海岸側にこれらの異教徒を受け入れるよう命じられた。ところが世界で最も狡猾な人種であるサラチェーニ達は、くわしく都市の城壁を研究し、夜中に何の抵抗もなしによじ登り、侵入する方法を発見した。罪のない人民の一部を刃にかけ、残りを奴隷にし、とりわけPandoneは多くの拷問の後に海に投じて溺死させられてしまった。（V.XI,p.224）」

さらに845年、Lottarioの戴冠式の翌年には、回教徒はテーヴェレ川をさか上り、ローマを襲おうとさえした。「サラチェーニ（サラセン人）の名前で筆者が意味しているのは、当時アフリカの征服者であり、支配者だったマホメット教徒のアラブ人のことである。モーリ（モーロ人）とは、彼らの臣下であるアフリカ人自身のことを意味しており、彼らもやはりマホメットの偽りの掟を信奉している。（ローマの）都市は当時十分に補強され、堅固に守られていた。だがこれらの蛮人達は、市の周辺で蛮行に耽り、特にこの当時市外にあった聖ピエトロ大聖堂を相手に、あらゆる装飾とそこで見出せる限りの価値あるものを選び去って、その食欲を満たした。

(V. XI, p. 253)」

以後もこうした記述は頻繁に現れる。責任感の乏しい父の皇帝に代わって、875年の死まで約30年間実質的にイタリアを統治し、可能な限りその防衛に努めたのは、844年にイタリア王位につき、850年には父の同僚皇帝としてローマで戴冠したとされている Lodovico II であった。後に彼の没年でも見るとおり、ムラトリーはこの Carlomagno の曾孫に対して大いに好意的で、カロリング朝の歴代の皇帝中、曾祖父につぐ高い評価を与えているといえそうである。しかし彼のこうした労苦に対して、運命も親族や臣下達もあまり協力的だったとは言えない。それどころかかつてヴェルダン条約でドイツとフランスの原型を築くことに成功した二人の叔父は、さらに亡き兄 Lottario の北方アルザス、ロレーヌその他の領地の分割を企て、すでに見たとおり回教徒の相次ぐ侵入への対策に忙殺されている Lodovico II の隙をついてこれを併合してしまう。すなわち世界史で周知のメルセン（オランダ）条約の締結とその実行が行われるのだ。

「Carloが自分のものだと主張したのと同等の権利で、Lodovico も Lottario の王国の自分の部分を主張した。そして自分の主張に、もし Carlo が友好的な条約を承知しない場合の戦争の宣言をも加えた。その王国内にはひそかにあるいは公然と Lodovico の味方をする極めて多数の貴族達がいて、少なからぬ者が彼に拝謁してそれを勧めた。こうした事業のため使節や飛脚が大忙しで往来した。ついにこの年（870年）の8月、二人の兄弟の間で合意が成り立ち、まるで彼は生きていないか、その領地に対していかなる権利をも有していないかのように、甥の皇帝には一言も触れることなくそれらの領地を分けあった。（p. 373）」この後ドイツ王 Lodovico の許に法王および皇帝の使者が赴いて、皇帝の権利を守るため説得に努めたが、ドイツ王はむしろ長兄 Lottario が自分達との協定に違反してただけだと弁明した。勿論 Carlo 王への使者も同様にあしらわれた。

ところが皮肉にも、皇帝 Lodovico II が苦戦の末前述のバーリを回教徒の手から奪回して、その生涯で最も栄光に輝いたのは、こうした屈辱的なメルセン条約とほとんど同じ時期の出来事であったとされている。「この年（870）こそ、ついに皇帝 Lodovico II が回教徒をバーリの市内に封じ込めることに成功した年であった。すでにその包囲のために、多大の労苦と人員および経費の犠牲が払われて来た。（中略：亡き父 Lottario の北方の所領ロターリンジャを継いで、すでにメルセン条約によってその大半が失われていたと思われる同国の王となった弟 Lottario から兄に派遣された援軍も、暑さ等のためついに到達し得なかったこと。）しかし Lodovico 帝の粘りたるや、まことに輝かしいもので、この年の末には異教徒達の救出の希望を失わせ、その結果最後には降伏せざるを得ない状態にまで彼らを追い詰めた。（中略：回教徒が敗北した年代に関して三つの文献の検討。《筆者の感想：こうしたいわば叙述の一つの山に当たる箇所、直ちに年代決定に関する文献の問題にのめりこんでいるのは、いかにもムラトリーらしい。やはり芯からの文献学者であって、歴史物語の作者ではなかったのだろう。》続いて皇帝の軍隊が回教徒の三人の提督を破ったこと等）このことは、この地方の回教徒の力に少なからぬ動揺を与えた。

またこのことがバーリを飢えさせて、その征服を容易にしたのだった。(V.XI, pp.375-6)」その後回教徒の援軍が現れて、キリスト教徒の弱点をつくため、クリスマスに攻撃をかけるが、裏をかかれて敗北するといったエピソードが語られる。そして現代の定説では870年とされているが、ムラトーリが引用している文献では871年のおそらく2月4日、バーリが陥落したと記されている。

「この都市は当時の回教徒の虐殺から推測されるところでは、降伏したのではなくて武力で征服されたのだろう。サレルノの無名の年代記作者の証言によると、スルタンは無事に逃れた。十分堅固な塔にこもり、皇帝 Lodovico のこの遠征に加わっていたベネヴェント領主 Adalgiso を呼んで、彼に対して降伏したからである。十分その価値があるとして、自分の安全を要求した。なぜならベネヴェント領主は決して危害を加えないという条件で、スルタンに人質として、自分の娘をあずけており、スルタンも指一本触れないという誓いを立てていたからである。こうして Adalgiso は二人の友と一緒に皇帝にスルタンの助命を願い、皇帝もそれを受け入れたが、それが彼にとって仇となった。(V.XI, pp.381-2)」

すなわちこの不運な皇帝はこうした武勲によっても、必ずしも領主達によって感謝されず、むしろ危機に瀕したのだ。こうした南イタリアの領主達の動きを見ると、彼らはムラトーリでさえも十分には理解し難いような、複雑なメンタリティーの持主であることが推察される。しかしムラトーリが様々な文献をくわしく伝えているおかげで、我々は彼の価値判断をこえてそうした現実を推察することが可能となる。30年前に回教徒を招いたとされる Redalgiso とは異なり、Adalgiso は一応皇帝のバーリ攻めに加わりはしたが、その態度はかなり奇妙で、後にはさらにそれはエスカレートする。スルタンは命をとりとめ、捕虜としてベネヴェントに送られるが、この「世界で最も狡猾 (p.387)」とされている人物に、ベネヴェント領主 Adalgiso は「極めて重要な事件について相談した (Id.)」さらに『メッツ年代記』によると、Adalgiso はギリシャ人達の説得に動かされ、「彼の説得によって、サムニウム、カンパーニア、ルカーニア等の多くの都市がギリシャ人の支配に服した (Id.)」とされている。本来それらの地方は、東ローマ帝国の勢力範囲で、フランク族の武力の盛衰に伴って揺れ動いていたため、当然そうした事態も生じ得たのであろうか。

バーリ解放後のこうした不可解な動きは Lodovico を怒らせ、彼は軍隊を率いてベネヴェントに赴く。Adalgiso は忠誠と恭順を装って皇帝に会い、贈り物攻勢で納得させてしまった。しかしまたま皇帝の一行がベネヴェントに滞在中、「高慢と貪欲のいずれが勝っているか分からない (p.390)」皇后 Angelberga の行動がベネヴェント領主 Adalgiso の忍耐力を失わせたとされている。彼はこのときスルタンの知恵を借りたとされ、皇帝に「フランスの軍隊がこれ以上滞在しては、彼ら自身も不自由であり、自分の領民にも大きな損害をもたらす (p.391)」と説得して、フランス軍を帰国させてしまう。こうして僅かの手兵とともに残された皇帝に対して871年8月25日にベネヴェント領民の反乱が勃発し、「皇帝が正午の後休息していると、ベネヴェント

人達は結束して、彼を捕えに宮殿に押しよせた。彼を守っていたわずかなフランス（フランク）人達は急いで武器を取った。その騒ぎで目を覚ました皇帝も防御にかかる。Adelgisioはその抵抗を見て、宮殿の戸口に火を放った。そこで皇帝は皇后や何人かの仲間とともに、堅固な塔に閉じこもって、三日間防衛した。（V.XI,p.391）」この後、ベネヴェント司教が仲裁に入って、皇帝の一行は無事釈放されることになるが、9月17日まで捕虜として投獄されたとする年代記（Andrea 神父）もある。あるいは Erscomperto によると、このとき回教徒の大軍がサレルノに向けて上陸したため、皇帝を釈放せざるを得なくなり、「皇帝、皇后、皇女 Ermengarda、および彼の家来達全員が、いかなる時もこの件に関して、自分あるいは他人の手でいかなる報復も行わないことと、ベネヴェントの領域に武器を持ち、または武装して足を踏み入れないことを聖遺物にかけて強く誓うことを強制され、その後どこでも好きな所へ行くことを許された。

（V.XI,p.393）」これに対するイタリア内外の影響は大きく、皇后 Angelberga によるベネヴェントの収奪への非難もあったが、それよりもベネヴェント領域の回復のために戦った皇帝への忘恩を非難する声の方がはるかに大きかったとされている。また国外では皇帝暗殺の噂が流れたため、フランス国王の Carlo il Calvo もドイツの国王の Lodovico も一時あわてて対策を講じている。その後皇帝はスポレートの Lamberto（同地に同名の伯が二人いるとされている）に対し、Adelgisio の共犯を疑ったか、皇帝救出の努力をしなかったため強く憤慨していたと言うが、11月に北上してペスカーラに近い Vico で会議を開いて威信の回復を図る。その後皇帝ではなく、皇后がベネヴェントへの懲罰を企て、Adelgisio がコルシカに逃亡したという説があるが、これは確実に架空の説だとムラトリーは否定している。回教徒は失地挽回のため、アフリカから大軍を派遣して、サレルノに上陸、各地を荒らす。872年ベネヴェント領主 Adelgisio、カプア領主、スポレートの二人の Lamberto 伯らが、ベネヴェント領 Mamma に宿営中の回教徒を襲い、これを大敗させたとされ、ここでは Adelgisio は一転して英雄となっている。このとき皇帝は援軍を派遣したが、戦闘は彼らが到着する以前に終わっていたとされている。その後も皇帝は Adelgisio 懲罰を企てたが実現せずに終わったという。

やがて 875 年 6 月大きな彗星が現れ、8 月 12 日皇帝は 50 才で男性の嗣子なしで死去した。ロレーヌの問題とベネヴェントの反乱がこの皇帝の「二本の痛い心の刺（p.398）」だったとされているが、嗣子がないことがメルセン条約の実行を容易にし、彼の行動を比較的淡泊にしたのかも知れない。少なくともそのために彼の教会への寄進が多くなったことは確実である。彼のミラノの聖アンブロジーオ教会の墓碑銘が示され、その慈悲深さを称える Regione のラテン文（p.432）が引用されているのを見ても、ムラトリーのこの人間らしい、善良で誠実な（まさにムラトリー好みの）この皇帝に対する好意が十分に推察し得る。我々の印象では、余りにも等身大の人間的な君主であったため、支配者としての人間離れした手腕やカリスマが決定的に不足していたという印象は否定し難いが、やはり当時の君主としてはその誠実さや善意は貴重であったことを認めなければなるまい。またその死が、少なくとも彼の時代までイタリア北部で享受されていた平和

の終わりを意味していたことをも。彼には男子はなかったが Ermengarda という娘がいて、プロヴァンス公 Bosone に嫁ぐ。野心家の Bosone は妻の高貴の血を盾に 879 年、自らプロヴァンス王として戴冠して南仏に王権を築く。皇帝の女系の血縁の影響力が小さくなかったことを示す一例である。

この皇帝の死と共に、後の Federico II やイタリア王国時代前後の自称皇帝等わずかな例外を除くと、イタリア在住の皇帝は絶えてしまう。通常カロリング皇帝とイタリア王国との境目は、887 年に生じた Tibur の帝国議会における肥満帝カール三世 (Carlo il Grosso) の罷免決議とされているが、イタリア自体にとっては、Lodovico 帝の死が一つの時代の終わりを意味していたといえる。甥の Lodovico II の死後、本来ならばその地位を継ぐべきドイツ王の Lodovico がおそらく老齢のため、すでに何度もそうして来たとおりの、長子 Carlomanno を派遣して皇帝の地位と権利を狙わせたが、この王子はブレンタ川の畔 (ヴェネト地方) で叔父のフランス王の王 Carlo il Calvo (禿頭) と会見して、帝位を叔父に譲って帰国。Carlo はローマへ赴き、後世に女性だと噂された¹⁰⁾ 法王 Giovanni VIII の手で戴冠された。しかし生来貪欲なフランス王は、876 年イタリアの領主達からイタリア王に選ばれ、さらに帰国してフランスで領主達によって皇帝と認められると、ドイツ王子との権利山分けの約束を守らず、さらに自分はライン川の水を飲み干すことが出来るほど多くの馬を持っていると自慢してその富強を誇った (p.444) とされている。しかもこの年ドイツ王 Lodovico が死去したため、有頂天になっていた皇帝は軍隊を率いてドイツ領内に侵入、対岸にいる Lodovico III (亡きドイツ王の次男 Carlomanno の弟でムラトリーは II としているが、恐らく誤り) に使者を送り、相手が少数なのを見て話し合って合意に達すると見せかけて、次の夜奇襲をかけたが、見事裏をかかれて敵の逆襲に会い、死者や捕虜も多数に上り、捕虜の中には司教 1、修道院長 1、伯 4 が含まれていた、とされている。

(p.446) 当時イタリアでは、回教徒、東ローマ帝国の勢力、各地の領主らが入り乱れ、法王は再三皇帝の南下を要請、禿頭帝はようやくイタリアに来たが、ドイツから Carlomanno 軍が来たと聞き逃走、877 年 10 月 13 日、逃走中のモンスニ峠で熱病のため急死。すべての年代記作者は、熱から解放されるため、寵愛していたユダヤ人医師から与えられた毒のために死去したと記しているとする。

かくしてちょうどイタリアに居合わせた Carlomanno が、そのままイタリア王の地位を継ぐ。その年に継いだか、あるいはドイツをまとめるため一度帰国して翌年にその地位を継いだかは説が分かれるようだが、ムラトリーはこの年のことだとしている。しかし 878 年には祖国バヴァリアで発病し、880 年に死去してしまうのでイタリアに対してはほとんど影響を残さなかった。Carlomanno が発病して口も利くことができなくなったのに乗じて、次弟がドイツの本拠の領地を確保し、その弟 Carlo III (il Grosso 肥満) がイタリアに南下して 879 年 10 月の末にミラノ大司教の手でイタリア王に即位、さらにローマで 880 年または恐らくその翌年に皇帝として戴冠式を挙行して帰国の途についた。法王はローマを含めた南イタリアの混乱、特にナポリ公兼ナポリ

司教 Atanasio II が回教徒と親密であることを訴えた。ベネヴェントでも回教徒と親しかったかの Adalgiso の息子 Radelchi または Adalgiso II が、当時ベネヴェント領主となっていた Gaideriso に対してその身内の者がクーデターを起こしたのに乗じて領主となる。このように南イタリアにおける回教徒との関係は複雑であった。皇帝は 873 年法王 Marino の要請でイタリアに下り、法王と会見するが、その法王はすぐ病死した。皇帝はこのころドイツに戻り、ドイツでも甚だしくなったノルマン人侵入への対策に頭を痛める。特にフランスへの侵入が相次ぎ、835 年皇帝への不満が高まる。皇帝は懐柔策として Frisia の統治を委ねていたノルマン公 Godifredo が反乱の気配を示したので、騙し討ちして殺した。しかし 886 年ノルマン人はフランスで猛威をふるい、パリを包囲した。皇帝はパリに向かうが、武力の解放を諦め銀 700 リブラを与えて帰国させたため、威信を失う。(V.XII, p.86) 翌 887 年、Triburia (Tibur) で議会が開かれるが、肥満帝 Carlo の皇后 Riccarda が Vercelli の司教 Liutvardo と不倫の仲だとする告発がなされ、神明裁判により、結局無罪となるが、修道院に入れられたとされる。すでに見たことのあるこの時代特有の裁判伝説である。この議会でドイツの君主 Carlomanno の庶子 Arnolfo を皇帝に待望する声が高まり、888 年肥満帝 Carlo は退位を強いられその後間もなく死んだとされている。自分の召し使いに絞め殺されたとする説や、Arnolfo の権力確保の陰謀説もあり、どうやら変死らしい。こうしてカロリング正嫡の帝位が断絶した。

本論では簡単に触れるに止めたが、この時代の叙述においてムラトリーが最もしつこくトレースしている事項の一つは、フランク族と法王庁との関係である。まずムラトリーは皇帝が法王にどれだけの権利を与えたかを検討しているが、当然皇帝は自分の権利を守り、法王庁が主張するほど多くのものを与えていないことを示す。さらに両権力の信頼関係についても観察し続けている。それはロンゴバルド族が実権を有していた時代には蜜月状態にあったが、一旦フランク族がイタリア支配を開始すると、当然散文的な関係に成らざるを得なかった。そして紛争時には皇帝達がしばしば貴重な協力者であったが、すでに Lottario の布告でも見た通り、平常の皇帝は墮落しやすい法王庁の煙たい監督者であったという事実を明らかにする。それらを通して浮かび上がるのは、この当時の法王権が決して世俗の権力よりも精神的に優れてはいなかったという、当然だとはいえ教会にとってはあまり触れられたくない事実だったようである。

ところでこの時代に関しては、いわゆるカロリジアン・ルネサンスの問題を始め多くの問題があり、ムラトリーは断片的な形でだがしばしば鋭い指摘を行っているのだが、今回のノートはこの時代のイタリア・カロリング朝の君主達の動静をたどることに止めたい。

注

- 1) A cura di G.Falco e F.Forti, *OPERE DI LODOVICO ANTONIO MURATORI*, (Tomo I, VII Le OPERE CONCLUSIVE, *ANNALI D'ITALIA*, Milano-Napoli 1964, pp.1179-1203.
- 2) *OPERE DEL MURATORI*, TOMO XXV-XXVII, *ANNALI D'ITALIA* TOMO X-XII, Venezia 1790.
- 3) Sergio Bertelli, *ERUDIZIONE E STORIA IN LUDOVICO ANTONIO MURATORI*, Napoli 1960, p.436.
- 4) 以下の注ぬきの引用はすべて注2)の文献からのものである。出典は注とせず本文中に記す。
- 5) Luigi Salvatorelli, *SPIRITI E FIGURE DEL RISORGIMENTO*, Firenze 1961, p.50.
- 6) フランク族のカロリング朝は法王権との妥協で王権を獲得、法王庁はこの時さまざまな寄進地を得たが、その領域は極めて複雑で、スポレートやベネヴェントは特に微妙だった。
- 7) ムラトーリは大著 *DELLE ANTICHITÀ ESTENSI ED ITALIANE* の2巻を1717、1740に刊行した。
- 8) 注2)のVol.XI, pp.103-5.
- 9) 例えば中学生向けの教科書、Bernardino Barbadoro, *VENTISETTE SECOLI DI STORIA D'ITALIA*, Firenze 1972の付録の年表の数字。以下の記述でも同様。
- 10) 法王 Giovanni VIII が女性だったという伝説を、ムラトーリはV.XII, pp.18-19で強く否定。

ノート 6 イタリア王国時代とその君主に関するムラトリーの叙述について

皇帝 Carlo il Grosso (皇帝カール三世または肥満帝) が退位させられ、その翌年の 888 年失意の内に他界して以来、イタリアの内外より諸侯が現れてイタリア王と名乗り、目まぐるしく王権が交替するいわゆるイタリア王国時代が到来する。後に見るとおり、それらのイタリア王達はしばしば皇帝と名乗ったが、その権力の及ぶ範囲は辛うじてイタリアの中北部と外人の場合それに加えて本拠とする領域内に限られ、しかもその地域でもその権威は決して安定したものではなかった。したがってその前後の時代の皇帝に比して著しく権威が低く、自称皇帝扱いされている。しかしムラトリーは皇帝としての戴冠式を挙行していれば正式の皇帝として扱い、スポレート *Guido* 等も皇帝として年代の冒頭に明記している。イタリア王に関しては、後に見るとおり複数の王権が並立している場合が多く、その勢力圏は常に揺れ動いていて、実にややこしい状況を示している。今回のノートの扱う範囲は年代的には 888 年の Carlo の死を起点とし、下限は常識的には 962 年のサクソニア公 *Ottone I* (オットー一世) すなわち、いわゆるオットー大帝の神聖ローマ帝国皇帝即位あたりまでと考えられるが、このノートでは、ムラトリーが最後のイタリア王国時代の王として扱っている *Ardoino* 王の時代までの期間を簡単にフォローし、全体で約 130 年分をカバーして、それに続くイタリア・コムーネの時代につないでおきたい。

今回の研究ノートは、イタリア史上でもとりわけ資料が不足していて我が国でもほとんど紹介されていない時代を扱うので、前回同様、ムラトリーが史実と見なして文献的証拠と共に紹介した『年代記』自体の叙述内容の紹介や簡単な分析に終始せざるを得ない。

まず例のごとく、参考のために G.Falco と F.Forti による抄録¹⁾を眺めておく。その中で今回のノートが扱う時代に関係しているのは、10世紀における法王選挙の混乱を扱った項 (pp.1203-04) から、1013 年のロンバルディアのコムーネを扱った項 (ここでムラトリーは早くもコムーネ相互の党派的系列の闘争とコムーネの軍備が始まったことを記す。pp.1215-16) までのわずか 9 項目 14 ページに過ぎない。扱われた年数がわずか 128 年間だとは言え、かつて資料不足のため枚数が少なかったロンゴバルド族の時代に関する抄録でさえ、206 年に対するに抄録が 35 ページ²⁾あったのに、128 年に対して 14 ページとはかなり手薄であることを認めなければなるまい。参考のため残りの 7 項目を示すと、pp.1205-07、Teodora とその孫の法王 Giovanni X について、pp.1207-08、Berengario I の最期、pp.1208-10、Giovanni X の死と Baronio の批判、pp.1210-11、10世紀と歴史資料の乏しさについて、pp.1211-12、法王 Giovanni XI を偽法王と呼んだパローニオに対する反論、pp.1212-14、法王 Silvestro II の評価、pp.1214-15、最初のコムーネ生活の兆候 (この項目は Acqualonga におけるピサとルッカの戦争を記録し、またミラノの内紛にも触れており、さらに歴史家シゴーニオ Sigonio が、この年に関してピサ、ジェ

ノヴァ、フィレンツェがヴェネツィアを真似て商業や軍事に勇名を馳せ、艦隊を建設したとしていることを紹介して、その説は誤っていて、他の二都市とは異なりフィレンツェのみは当時はまだ遅れていたことをも指摘している。これらの記述は、ムラトーリがイタリアにおけるコムーネ活動の開始をコメントしたものとして極めて重要である)。なお以上の抄録には、法王庁に関係した記事が多いが、本論はとてそこまで手が回らないので、主にイタリア王権をめぐる諸領主の動きをフォローすることに終始する。ちなみに筆者が利用しているヴェネツィア 1790 年版の『イタリア年代記』³⁾によると、これは『ムラトーリ 作品集』第27巻（『イタリア年代記』第12巻）p.100 から同第28巻（『年代記』第13巻）p.394 までの全体で759 ページにわたる部分であって、前ノートがカバーしている部分と比較しても、記述は年数に比して多いとは言えない。こうした記述の少なさ、いわば密度の薄さは勿論ムラトーリが手を抜いたためではない。実はムラトーリ自身もそのことを意識してこの時代について以下の通りコメントしている。

「この時代にはイタリアは一般に平和を享受していたけれども、その顔は大いに歪んでいたことを告白しなければならない。なぜならその芸術、学問、美点はすでに多年にわたって追放され、この上ない無知が至るところで支配していたからである。それは手稿だったためにあまりにも高価過ぎて、ほとんど書物など所有していなかった俗人の間だけではなくて、聖職者達、それも修道士達の間でさえそうだった。彼らも多くの場所で書物を筆写する習慣を止めていたのだ。こうした無知や、際限なく増加した悪徳の持ち主の前例のために、習俗の墮落は大いに進み、キリスト教自体がその影響を受けて、いわば物質化し、精神を失っていたのだ。（V.XII, p.373）⁴⁾」

888年、罷免された前皇帝が死去したという情報が伝わると、イタリアではスポレート公の Guido とフリウーリ公の Berengario I がイタリア王の地位を狙って名乗りを上げた。すでにこの両者は、イタリアを主たる根拠地とする Lodovico II の他界後、イタリアの有力領主として頭角をあらわし、特に弱体化したドイツ出身の皇帝 Carlo il Grosso のもとでは二人とも独自の動きを示しているようである。Guido、Lamberto という名前が父子として頻出するスポレート公家に関しては、類似のスポレート公家が二つあったらしいとされ、その素姓は定かではないらしい（V.XII, p.34）。他方 Berengario は父がフリウーリ公 Eberardo または Everardo、母親が Lodovico il Pio の娘 Gisla または Gisela (m.867) であったとされ（p.105）（実は Carlomagno その人の娘とする系図もある⁵⁾が、年代的にかなり困難であると思われる）、前ノートで見たプロヴァンス王の場合と同様、明らかに母が皇帝の娘であったこと、つまり女系の権威によって権威を主張した例だと思なすことができる。同時にフリウーリとスポレートがロンゴバルド族の有力な拠点だったことと、これらを領有する二人の公が、イタリアの最有力の王権への候補者として名乗りを挙げていることとは、おそらく無関係ではあるまい。このことは、先にムラトーリが述べたフランク族とロンゴバルド族の平和的交替・共存説にとっても有利な事実であるように思われる。

これら二人のライヴァルは、Tibur の帝国議会で次の皇帝として指名されたバヴァリア王

Arnolfo の存在を無視したかのような行動に出、Guido は何らかの縁故があるらしいフランスに遠征してその後の覇権争いの軍事的基盤を作り、Berengario は諸侯に推されてパヴィーアに赴き、ミラノ大司教 Anselmo の手でイタリア王の「鉄の王冠」を戴冠されたとされている。なお後に皇帝達がローマで戴冠する前に、ミラノで戴冠してイタリア王の地位につく習わしが生じたこの「鉄の王冠」はこの時始めて作られ、モンツァの聖ジョヴァンニ・バッティスタ教会に保管されることとなったとムラトーリは記している (p.108)。しかし直ちにドイツから Arnolfo が南下、Berengario はこれを歓迎して、妥協が成立しイタリア王位を認められたとされている (p.112) が、話がうますぎるような感じもする。いずれにせよ Arnolfo の陣営では馬の疫病が流行して、その多数が死んだため、早々とドイツに帰国してしまったとされ、結局 Arnolfo には Berengario を討つ余裕がなかったというのが真相らしい。

ところがムラトーリの推測では、恐らくイタリアが Berengario 王の下で約一年平和を楽しんだころ、フランスから兵を率いて帰国した Guido が Berengario に挑戦した。戦争は二度にわたり、一度目は889年にプレッシャの領域内で戦われて Berengario が勝ち、二度目はムラトーリの考えではピアチェンツァの領域内で戦われ、今度は Berengario が大敗を喫して Guido がパヴィーアの会議で王権を獲得した。しかし Guido には Berengario をイタリアから追放する力がなく、Berengario はフリウーリ公領を確保し続けた。この当時回教徒、ノルマン人と並ぶもう一つの侵入者ハンガリア人が、ドイツおよびイタリアに出没し始めたとされている。ドイツで皇帝の候補者としてイタリアの支配を予定している Arnolfo の他に、すでに他界したプロヴァンス王 Bosone の嗣子で、亡き皇帝 Lodovico II の娘 Ermengarda の息子 Lodovico も、その高貴の血を根拠にイタリア王位と皇帝位への野心を抱く。スポレート公家の Guido は、これらライヴァルに先駆けて極めて親密な関係にあったとされている当時の法王 Stefano V の手で891年にローマで戴冠式を挙げて皇帝に就任している。

だが893年にはドイツの Arnolfo がイタリアに、私生児 Zventebolco または Zventebaldo を派遣し、Berengario もこれに協力したが、戦い上手の Guido によって撃退される。この事件の後、皇帝 Guido は、Berengario 追及の力を強めた。894年 Arnolfo が時の法王の招きもあって南下、ベルガモ知事の Ambrosio 伯が抵抗して、包囲攻城を受けて2月に落城、ドイツ人は市内は勿論教会の内部でさえ暴行と略奪を働き、Ambrosio 伯を縛り首にする等、その残酷さにイタリア人は衝撃を受けた。各都市は我勝ちに降伏し、侯達も Arnolfo の下で服従を誓うが、一部は領主権を巡って逮捕され、一部は逃走している。しかし Arnolfo はライヴァルの Guido の討伐を急いでいない。この年12月30日 Guido は病死、その息子 Lamberto が後を継いだ。(p.162) ムラトーリは、Lamberto が帝位をも継いだと見なしている。

その後の Arnolfo の足取りをムラトーリはよくつかんでいないが、895年にはドイツに帰国したらしい。Berengario は Guido の死を知ってパヴィーアを占領し、イタリア王の地位を回復、しかし父のあとを継いだ Lamberto の支配もそのまま続き、他方法王 Formoso は再度ドイツよ

り Arnolfo を招き、彼は大軍を率いてまた南下した。895 年12月にはパヴィーアに到着。この際 Berengario やトスカーナの Adalberto 等に Arnolfo に対する反乱の陰謀があったとされる。勇敢な前皇帝 Guido の未亡人 Ageltruda もムラトーリが「野心的で野蛮な (pp.171-2)」と評した Arnolfo の進路を妨害した。ムラトーリは「全くのおとぎばなし (p.173)」とコメントしつつも、ローマ人も一時期城壁を閉ざして抵抗したが、「一匹の野ウサギが、市に向かって逃げ出し、Arnolfo の軍隊が大喚声を挙げて後を追うと、ローマの守備兵達の勇気が挫け、それに気付いた Arnolfo の兵達はこの勇敢な市に攻撃をかけて奪取した (Liutprando, V. XII, p.173)」という逸話を伝えている。こうしてついに Arnolfo は、法王 Formoso の手でローマで戴冠された。しかし彼はその後脳の病気に罹り、ドイツへ帰国した。フェルモの城で Arnolfo の軍に包囲された Guido の未亡人の前皇后 Ageltruda が、Arnolfo の召使いを買収して眠り薬を飲ませて頭に再起不能になるほどの変調をもたらしたためだと伝えられる。ムラトーリはここでも「これは、もうどう見ても、余りにも超自然的なことと、人間の悪意、何らかのとりわけ大領主の悪の効果に影響されやすい民衆の間で広がった作り話である (p.176)」とコメントしている。Arnolfo はその帰途、これまで忠義面で同行しつつ、裏切りを企んでいた Berengario を捕らえて両眼をえぐり取ろうとしたが、仲間に知らされた Berengario は素早く逃走して難を逃れたとされる。ムラトーリは「この時代の歴史家達は最古の記録者達に虐待されている (p.178)」と評しているが、まさに記録が不足しているだけでなく、信頼し難くなっている時代であった。ムラトーリは当時の流言を批判しながら記録することを怠らない。その後ドイツに戻った Arnolfo は 899 年に死んだとされている。

Arnolfo が帰国すると直ちに Berengario が北イタリアを奪回、しかし Lamberto 等の勢力も健在で、さらにベネヴェント以南の各地では土着領主とギリシャ人の役人それに回教徒の侵入者が出入りして、複雑極まる動きを繰り返していた。この当時ギリシャ人に服従していたとされるベネヴェントが Lamberto 帝の弟 Guiso の手でイタリア人の手に奪回されたという。こうして Lamberto は、北部の一部や何らかのコネがあるらしい先に見たフランスの領地の他に、根拠地のスポレート公領を始め、ベネヴェント公領、さらにトスカーナ公領にも影響力を及ぼし、ローマの一派とも親しくてその分ローマと法王庁にも影響力があった。だから当時としてはまずまずの根拠地を有していたと言える。多分そうした基盤に基づいて、896 年にパヴィーアで Lamberto と Berengario の間の和平が成立した。

しかしこうした状況の中で、当時トスカーナ公 Adalberto II は「唯一自ら富裕だと呼ばれることを認めた (p.196)」ほどの有力な領主であったが、その妻は Berta といい、亡き皇帝 Lodovico II の弟に当たるロターリンジャまたはロレーヌ王 Lottario の娘（皇帝 Lottario の孫、Carlomagno の曾孫）という毛並みの良さで、初婚でプロヴァンスの伯爵 Teobaldo と結婚して Ugo（後のイタリア王）を産み、その死後この Adalberto と再婚、898 年夫をけしかけて皇帝に反逆させた。Lamberto はその年内にアレクサンドリアに近いマレンゴの森の中で狩りの途中、

落馬して首の骨を折って死んだという。一説によると、皇帝は反逆したミラノ伯 Maginfredo を斬首させた後、その息子 Ugo に後を継がせて側近として用いていたが、Ugo は狩りの途中で皇帝と二人きりになり、イノシシを待っているうちに皇帝が眠ってしまったのでひそかに棒で殴り殺したとされている。ムラトリーはこの説を、余りにも安易なおとぎ話だと否定している。さらにこのわずか18才で死んだとされる皇帝について、「素晴らしい素質と慎ましい習慣とに恵まれ、大いに期待された若者 (p.204)」だったと賛辞を惜しまないが、ムラトリーには概して夭折した君主には点が甘くなる傾向があるように思われる。

かくしてついに Berengario は唯一のイタリア王として復権、元皇后 Ageltruda にもその権利を認めて妥協をはかり、またパヴィーア等にも多くの特権を認めた。しかし亡き Lamberto 一派は、プロヴァンス王 Bosone と Ermengarda の息子 Lodovico をプロヴァンスより招いて、自派の権利を守ろうとした。プロヴァンス軍がイタリアに侵入、たまたま同じころハンガリア人のイタリア侵入もあってイタリアの状況はますます悲惨となる。900 年には Arnolfo の嫡子 Lodovico も私生児 Zventebaldo を破ってイタリア王を名乗る。Berengario はハンガリア人相手に 3 倍の兵力を集めてこれを討とうとした。ハンガリア人は「窮地に陥ったと知って、Berengario 王に使者を送り、すべての捕虜とすべての戦利品を返すことを条件に、平和裡に逃してくれるよう請願し、イタリアには二度と戻って来ないことを約束、そのため自分達の息子を人質に出そうとした。Berengario は「逃げる敵には金の橋を架けよ」という諺を知らなかったに違いない。彼は自分達が敵全員の首をはねたり捕らえたりしている姿を想像して、彼等には絶対に退路を許さないと言い張った。この無慈悲な返事はハンガリア人達を自暴自棄に追いやったが、これこそ戦闘において勇気を奮い立たせるための最高の妙薬であった。だから自分達の生命を十分高く売ろうと決心して、突如彼等はキリスト教徒達に襲いかかったが、キリスト教徒達はそんな不意打ちに遭おうとは露だに思わず、飲んだり食ったりしながら漫然と待機していたのだ。それは戦さなどと言ったものではなくて、足腰が利かないあらゆる者に対する、屠殺そのものであった。だれ一人容赦しなかった。大共はそれほど怒り狂っていたのだ。それ以後イタリア人は一人として、彼等に立ち向かおうとはせず、彼等はその後ロンバルディーアを勝ち誇って駆け巡り、その年の末にはハンガリアに戻ったが、また翌年イタリアを荒らしに来るためであった。(V. XII, pp. 220-221)」

この敗戦の指揮者としての Berengario の責任は重大で、王としての威信がこの時に失われたのも当然であった。かくしてプロヴァンス王 Lodovico の権威が上がる。901 年彼はローマで法王 Beredatto IV の手で戴冠式を上げ（この辺りの年代や記述は今日の基本的な定説⁶⁾とはやや異なるが、ここではムラトリーの記述を紹介する）、Berengario は再び逃亡して再起をはかる。Berengario は、Lodovico がローマからの帰途、自分と親しい司教 Adelardo がいるヴェローナで滞在している時に罾を仕掛け、Lodovico の陣中に自分が死去したという噂を流し、その隙について一夜軍と共に市内に侵入、教会に逃げ込んだ Lodovico を捕え、二度とイタリアを訪れな

いことを約束させて、祖国に追い返した。かくして遅くとも 902 年の 7 月にはイタリア王の地位に戻っていたとされる。なお Lodovico を追い返す際に、彼の両眼をくりぬいたとする説を紹介して検討し、それは後年の出来事だと推理する。ところが早くも 904 年には、Lodovico がまたぞろプロヴァンスから大軍を率いてイタリアに侵入、この当時はまだ Lodovico の両眼が見えていたとムラトーリは自分の推理の正しさを示す。しかし極めて奇妙なことに⁷⁾、ムラトーリは Lodovico が再び問題のヴェローナ滞在中に Berengario が死去したという噂が流れ、油断して Berengario の夜襲に遭い、今度は違約を咎められて両眼をくりぬかれたという説を記す。事実だとすればまさに漫画だが、ムラトーリも本気で二度こういうことが起こったとは考えていないはずである。しかしムラトーリは Lodovico が眼をくりぬかれたのはこの時だと自説の正しさを強調するだけで、残念ながらそれ以上に説明を加えていない。おそらく Lodovico は一回目に来た時、ローマに向かう途中 Berengario 軍に圧倒されて二度と来ないと約束して帰国していたが、二度目に来た際にローマの戴冠式とヴェローナの夜襲が起こったと考えるのが妥当であろう。両眼をくりぬかれても死ぬとは限らず、この皇帝はその後も帰国して王位のみならず帝位をも主張し (p.260)、皇帝と自称しつつ 928 年まで生き続けたとされる。こうした曲折の後にイタリア王位は Berengario の手中におさまリ、平和が到来した。

しかし相変わらず回教徒等の侵入が相次いでいて、901 年には大虐殺と共にシチリアにおける回教徒の支配が完成したとされている。また 906 年の項には、イタリアとプロヴァンスの国境 Frassineto (トネリコ林の意) にスペインの回教徒が漂着して拠点を作り、その後周辺や旅人に対して猛威を振るったとされている。908 年辺りから、南イタリアではガエータに近い Garigliano の回教徒の拠点を攻撃するため、当時の賢人として名高い (p.265) ベネヴェントとカプアの領主を兼ねる Atenolfo、ナポリ公 Gregorio、アマルフィ市民等が南イタリア連合を結成したとされ、東ローマの援軍も加わったとされる。他方ローマでは奔放な貴夫人 (スポレートとカメリーノ侯 Alberico 未亡人 p.273) として悪名高い Marozia の一族 (その母も女傑 Teodora) が実権を握る。彼女は法王 Sergio III との間の不貞行為によって Giovanni XI を産んだとする醜聞が流れており、ムラトーリも親子関係は否定するが、彼女の不貞行為の可能性は認めている (pp.277-8)

しかしこの当時イタリアは珍しく平和に恵まれていたらしく、「Berengario 王の賢明な統治のお陰で、当時イタリアの主要部では安静と平和が続いていた。何故なら彼は当時の恐ろしいハンガリア人を好意的にさせる方法を心得ていて、うまくイタリアに立ち戻るのを抑えていたからだ (V.XII, p.281)」前に見た敗戦とやや矛盾するようだが、敗戦から学んだとも見なし得るであろう。913 年にはシチリアで革命が起こり、シチリアの回教徒はアフリカから独立したとされる。これは後のキリスト教徒によるシチリア奪回の端緒だった。さらに 915 年、回教徒が猛威を振るったため、法王 Giovanni X は Berengario に協力を求め、これまでローマとの関係が薄かった Berengario がローマに向かう。ムラトーリは 916 年説も有力だとしながら、915 年の

クリスマスに Berengario の戴冠式が行われたとする今日の定説に近い説を取る。さらに 915 年の 8 月には南部連合によるガエータに近い回教徒の拠点 Garigliano の解放があったとされる。Berengario 自身は参加しなかったらしいが、その配下の協力があつた。そこで捕えられた回教徒は殺されるか、奴隷とされた。(p.304) しかしムラトリーは 919 年の項でイタリア史が大きな闇に包まれていることを嘆いている。Berengario の妻はスポレート公 Suppone の娘 Bertila と推定され、その死後には彼の伴侶として Anna という名前が現れるという。(pp.319-20)

しかしイタリアでは、Berengario に対する根強い反対勢力が存在し、921 年にはイヴレーア地方を中心に、Berengario の娘婿である Ivrea 侯 Adalberto を筆頭とする Odelrico 侯、Gilberto 伯等の反 Berengario 陰謀が生じ、やがてブルゴーニュ王 Rodolfo II を招く計画が生じる。Adalberto 等の反乱は失敗して、Odelrico は死去し、Adalberto は一兵卒に扮して安い身代金で逃れ、Gilberto は運悪く露見して Berengario の前に連行されたが、棒で打たれた半裸体の姿を見て笑った Berengario は憐れんで彼を許した。しかし「Berengario はこの過度の寛大さを直ちに後悔することとなった。何故なら恩知らずな Gilberto はイヴレーアに戻るやいなや、他の反逆者達にそそのかされて、Rodolfo 王に軍隊を率いてイタリアに南下するようにすすめるためブルゴーニュに赴いた。すると30日も経たない内に、Rodolfo が軍隊を動員して、Berengario を退位させることに専念した。(V.XII, p.327)」すでに 922 年の12月7日には Rodolfo はパヴィーアにいて諸侯を集めて、イタリア王に選出されていたという。

Berengario はヴェローナに引き上げて、ハンガリア人の援助を得て、防備を固めていたという。ムラトリーによると、「皇帝 Berengario には敵に対する勇気も彼を守るために生命を賭ける信奉者や見方の党派にも不足してはいなかった。(V.XII, p.331)」とされていて、彼は軍隊を率いて Rodolfo と対決し、923 年 7 月 20 日、ピアチェンツァとボルゴ・サン・ドンニエーノの間のフィオレンツォーラで両者の合戦が行われた。この時は親子、兄弟が両派に分かれて戦ったとされ、Berengario 王は娘 Gisla とその夫イヴレーア侯 Adalberto の間で生まれた孫 Berengario II とも戦ったとされる。両軍共に勇敢に戦い、結局一度は Berengario 軍が勝利を得たが、ブルゴーニュ王の姉妹 Gualdrada と結婚していた Bonifazio 伯(後のスポレートおよびカメリーノ侯)が戦闘の外で潜んでいた後、勝った Berengario 軍が油断して隊形を崩し、戦利品集めに夢中になり始めた瞬間に攻撃に出た。「だから運命の顔の向きは逆転、逃走していた Rodolfo の兵士達は軍旗の許に戻って来て、易々と Berengario の軍勢を撃ち破った。だが両軍のこのような大殺戮のために、Liutprando の言葉を信用するならば、彼の時代にはイタリアに軍人はほとんど残っていなかった (V.XII, p.334)」とされている。我々は13世紀にドイツから来た Corradino がシャルル・ダンジューに挑戦したタリアコッツォ戦争でも、それと似たような逆転の例⁸⁾を見るが、まさに奇跡の逆転だった。

こうした敗北にもかかわらず、Berengario はヴェローナに引き上げて再起のチャンスを待った。彼は勇猛なハンガリア人を利用して Rodolfo を駆逐する計画を立てたが、勿論それには大

きな被害が予想された。ムラトリーは、このために、あるいは他にも何らかの不明の理由があったかも知れないが、これまで彼の最も忠実な味方であったヴェローナ市民の間で、Berengario に対する陰謀が生まれたとする。陰謀を察知した Berengario は、子供の名付け親だった Flamberto がその首謀者だと知って、「彼を目前に呼ぶと、これまでに与えた恩恵を思い出させた上に、彼が君主に対して変わりなく忠誠を保つ限り、さらに大きな恩恵を施すことを約束すると共に、黄金の茶碗を与えて静かに去らせた。しかし忘恩の Flamberto は、陰謀が露見したことを知ると、その夜の内に仲間達をけしかけて皇帝 Berengario の生命に対する企てを実行させた。この君主がその晩安眠していたことから、彼の心中では悪意や警戒心が大きな比重を占めていなかった事が分かる。彼は防御しやすい宮殿ではなく、彼の習慣に従って、真夜中に勤行が果たせるよう早起きするために教会のとなりの小さな部屋で眠っていた。彼は悪事のことは全く疑っておらず、警護の者による警戒すらしていなかった。早朝の勤めの鐘で目を覚ますと彼は教会へ行った。その直後に一団の刺客を連れた Flamberto が現れ、Berengario は彼らの望みを知るため近付き、彼らの剣でいくつもの傷を受け、その足元に倒れて死んだ。勇気に関しては彼よりも優れた者はほとんどおらず、敬虔さ、寛大さ、正義愛において誰も彼には叶わない君主である Berengario は、このような悲惨な最後を遂げた。(V.XII, p.336)」以上の記述から、ムラトリーはこれまでに見た彼の数々の判断ミスや失敗にもかかわらず、Berengario に対して極めて好意的であるばかりか、君主としても過度とも言える最高の評価を与えていると見なすことができる。Flamberto の一味は間もなく忠義の家来 Milone によって、暗殺の三日後に縛り首にされた。Milone はヴェローナ伯として一帯を治めた。他方この時 Berengario の援軍として招かれたハンガリア人は予定通りイタリアに来て、すでにイタリアから一度 Rodolfo が帰国していたので、Salardo の指揮下でイタリア王国の首都パヴィーアを含めた多くの都市で放火や略奪の限りを尽くした。

Rodolfo は一度帰国した後、再び南下して王権を振るおうとしたが、この時プロヴァンス公 Ugo とその異父弟妹達による反 Rodolfo 陰謀が進行していて、Ugo がイタリア王に推挙される。この Ugo は、すでに見た通りロレーヌ王 Lottario (皇帝 Lottario の息子、Lodovico II の弟) が後に妃とした愛妾 Gualdrana から得た庶出の娘 Berta が、プロヴァンス伯 Teobaldo と結婚して産んだ息子の内の長子である。Berta はその夫の死後、「富裕公 (il Ricco)」というあだ名を持つトスカーナ公 Adalberto と再婚して、後のトスカーナ公の Guido とその弟 Lamberto および娘の Ermengarda を産む。Ermengarda はイヴレーア侯 Adalberto の後妻 (先妻はイタリア王および皇帝 Berengario 王の娘 Gisla) となったとされる。これらイタリアの異父弟妹達は反乱を企み、当時夫の Adalberto を失った Ermengarda が北部の領主達を味方に引き入れて一大陣営を結成した。Rodolfo は軍隊を率いてティチーノ川がポー川に合流する地点で対決したが、「夜になると Ermengarda は彼女のメモを送り、彼が彼女的手中にあり、すでに彼を捕虜にしていること、何故なら彼の党派の連中は全員 Rodolfo を見捨てて彼女に従うことしか念頭にな

いからだが、彼女自身は Rodolfo の幸福と友情を望んでいて、彼らのそうした要請に従うつもりはないことを知らせた。Rodolfo はこれらの狡猾な言葉に仰天し、その夜の内に床に就く振りをして、誰にも気付かれないうちにパヴィーアへ行って Ermengarda の軍に合流した。夜が明けると Rodolfo が起きて来ず、彼の派の領主達や廷臣達は困ってしまう。結局彼がいないことが判明し、人々は各自いろいろなことを言い始めた。その時彼の陣営に、Rodolfo が敵の陣営に加わって彼らを攻めて来るという知らせが届いた。このことは全員に衝撃を与えるのに十分で、そのため一同は走るところか、空を飛ぶようにしてミラノ目指して逃げて身の安全を図った。(V.XII, pp.347-8)」

この後 Rodolfo の味方達は完全に彼と手を切り、Rodolfo はブルゴーニュに逃げ帰ったとされているので、ほとんど自滅に近い形で王権を失ったわけである。実際にこうした鮮やかな謀略が存在したかどうかはわからないが、いずれにせよせっきくイタリアには戦士が残り少なくなったといわれるほどの激戦を経て獲得された Rodolfo の王権は、極めて短期間の内にあっさりと崩壊して、プロヴァンス王 Ugo がイタリアに招かれた。これに対して Rodolfo の妻の父で、ドイツの Svevia の有力な公とされている Burcardo (その存在が Rodolfo の野心の基盤だったとされる) が娘婿あるいは自らの地位の挽回を目指して大軍を率いて南下し、ミラノで大司教 Lamberto の歓迎を受ける。いろいろと大言壮語して人々の響感を買うと共に、やはり謀略の標的とされ、普通は許されない鹿の猟を許されたりして煽てられている内に畏が仕掛けられ、ノヴァーラの市を通過する途中で襲撃され、溝に落ちて槍で突き殺されてしまう。教会に逃げ込んだ家来も皆殺しに遭い、このニュースは Rodolfo にショックを与えて二度とイタリアに関わる勇気を失ったとされている。

こうして度重なる謀略のおかげで Ugo は 926 年にプロヴァンスから迎えられ、イタリア王として 6 月頃に戴冠式を挙行了。ムラトリーはこの王に対して、「むしろ小ティベリウス、大変勿体振った狐、本物の偽善者で、人間的な目的のために教会と聖職者に大きな敬意を表しはしたが、神や正義に対する彼の行動においてはそれをほとんど示さなかった (V.XII, p.354)」と露骨な嫌悪を示す。この当時イタリアではスラヴ人も侵入して混乱を極める。早くも 930 年にはパヴィーア市民による Ugo 暗殺計画が練られるが、それを察知した Ugo は何食わぬ顔で油断させ、王を迎えに市の城壁の外へ出た一味を捕えて処刑したとされる。

すでに多少触れたが当時は法王庁も衰微と墮落の極致にあり、たとえばムラトリーはいずれもデマだと強く否定しながらも、すでに見たように少し以前の Giovanni VIII には女性だったという説があることや、Giovanni X には妻帯していたという説⁹⁾があることを伝えている。まさにイタリアはすでに見た通り「顔が歪んでいた (p.373)」のであり、読み書き出来る者はわずかとなり、迷信や偽の奇跡が流行し、裁判には決闘や神明裁判が横行した。931 年前後には、Ugo が息子の Lottario を同僚のイタリア王に就任させた。931 年にはローマで、女傑 Marozia の息子が Giovanni XI として法王に就位。ムラトリーは、この法王が彼女と亡き法王 Sergio III との

不倫の子だとする説を、明らかに中傷だとして否定している。¹⁰⁾またスポレート侯 Alberico と結婚して死別した後トスカーナ侯 Guido と再婚し、当時再び夫と死別していた Marozia には、息子を法王に就任させる力があったことを認めている。

ここでムラトーリは Ugo に関する逸話として、当時のトスカーナ公で Ugo の弟の Lamberto が領主達にかつがれてイタリア王となることを警戒し、自分の母 Berta が再婚して産んだとされている Guido、Lamberto、Ermengarda ら異父弟妹は実は Berta が産んだ子ではなく、夫の目を欺いて実の子に見せた貰い子だと宣伝し、それを聞いた Lamberto が母の名誉のために兄に決闘を挑戦し、Ugo が自分の代理として送った若い騎士を倒したという奇妙な話を記している。

(p.383) トスカーナ侯 Guido、Lamberto 兄弟、あるいはその父トスカーナ侯 Adalberto とその弟 Bonifazio の兄弟等は、この時代頃から記録に名前が現れ始めるエステ侯家と関係があるらしい、とムラトーリは推定しているが、同時に「今日まで私はいかなる文書も見付けることは出来なかったが、、、(V.XII,p.385)」と確証がないことを率直に認めている。

イタリア王 Ugo は突如ローマの女傑 Marozia に求婚、彼女からローマに招かれて結婚する。多分 Ugo が皇帝位を得るために、法王庁との関係を結ぶための政略結婚であったが、この結婚は不評で、Marozia が最初の夫スポレート侯 Alberico との間で得てすでに成人していた息子 Alberico 一派の反乱が勃発し、Marozia は監禁され、皇帝はローマ市外に逃れ、トスカーナに退去した後、ローマを再び包囲、その後も再三包囲を試みたが、ローマの城壁の堅固さに打ち勝って占領することは出来なかった。924 年おそらくヴェローナ伯 Milone や同市の司教等に招かれてバヴァリア公 Arnolfo が南下したが、ヴェローナからパヴィーアに向かう途中 Ugo 軍に敗北して帰国した。狡猾な Ugo は法王 Leone VII の調停でローマの Alberico と和解、彼に自分の娘 Alda と結婚させた。しかし Alberico は義父となった Ugo のローマ入城を拒み続け、結局 Ugo は皇帝の位にはつかなかった。かつての Berengario との戦いの手柄によってブルゴーニュ王 Rodolfo の義兄弟 Bonifazio が占めていたスポレート侯兼カメリーノ侯の地位は、Rodolfo の退去の後 Ugo の甥 Teobaldo が占めた。この Teobaldo は捕虜を去勢することを好んだ奇妙な領主であった。トスカーナ公の地位も Ugo の弟 Bosone とその貪欲な妻 Willa の支配下に入る。しかし Bosone 夫婦は兄と対立して失脚してしまい、トスカーナは Ugo の私生児 Uberto の支配下に移る。なお 936 年にはドイツで後に大帝となる Ottone が父の後を継いでドイツ王となる。翌年南イタリアにハンガリア人が侵入。またシチリアのアグリジェントでも反乱が起きるが、回教徒が弾圧した。938 年にブルゴーニュ王の Rodolfo が死に、Marozia との結婚に失敗した Ugo は Rodolfo 王の未亡人 Berta と結婚し、自分の息子 Lottario を Berta の連れ子 Adelaide と結婚させた。Ugo は女好きな男で「愛妾達に溺れて新妻 Berta への夫としての愛情を欠いていただけでなく、あらゆる仕方で彼女を嫌悪の念をあらわにした (V.XII,p.422)」。Bezola、Roza、Stefania 等多くの妾に後の各地の高位聖職者を産ませただけでなく、息子 Lottario の妻 Adelaide とも関係した、とさえ中傷された。『ノヴァーラ年代記』の作者によると、「Ugo は

極端に狡猾で悪意に満ちた男で、誰が彼の悪口を言っているかを調べるため、あらゆる都市にスパイをはなっていた (V.XII, p.422)」とされているという。当時は国王に劣らず聖職者や修道士も墮落していた。母の夫 Ugo をローマから追放した Marozia の息子 Alberico は、孤軍奮闘、聖職者や修道士の綱紀引き締めにも努力したと評価されている (V.XII, p.426)。

Ugo のこうした陰湿な支配に対してイタリア各地で反抗心が強まり、940 年には母方の祖父に Berengario I を有したイヴレーア侯 Berengario II とその弟でスポレート侯兼カメリーノ侯（まとめてフェルモ侯とも呼ばれる。同地方の領主だった Ugo の甥 Teobaldo が 936 年に死去して後を継いだ）Anscario が反抗の中心となるが、Ugo はパラティーナの騎士の地位にある Sarlione に軍隊を与えて Anscario を攻めさせ、Anscario は馬もろとも穴に転落、無数の槍に突かれて死亡、Sarlione が Anscario の地位についた。Ugo はさらに兄のイヴレーア侯 Berengario II をも甘言で誘って宮廷に歓待し、やがて彼を捕らえて目をくりぬく予定であったが、Ugo の息子で父に似合わぬ善良な Lottario がひそかに警告したため、辛うじて Berengario は逃亡してドイツに亡命し、ズヴェヴィア公 Ermanno の許に避難した。善良な若い王 Lottario はこうして自らの墓穴を掘った。

このころハンガリア人の侵入があり、Ugo は金を与えて退去させている。また Ugo はこのころ猛威を奮った Frassineto の回教徒を東ローマ皇帝と協力して攻撃したが、とどめを刺すには至らなかった。943 年 Ugo は庶子 Berta を東ローマ皇帝の息子 Romano に嫁がせ、またドイツの Ottone とともに良い関係にあったが、イタリア国内では人望がなく、イタリアの領主達の不満を察知した Berengario の側近 Amedeo が、各地で反 Ugo の決起を促した後ドイツに戻ったと伝えられている。943 年に多分 Sarlione が死んで、トスカーナを治めていた庶子 Uberto がスポレート侯やカメリーノ侯の地位を兼ねたが、こうした一族による独占がますます Ugo の人気を落とした。かくして 945 年ドイツより僅かな兵と共に、イタリアの諸侯から待望されていた Berengario II がイタリアに帰国した。諸領主や司教に歓迎されて南下し、ミラノに到着した。Ugo はどういう魂胆からか、同僚イタリア王に任じていた我が子 Lottario 夫妻を、ミラノの Berengario の陣営に送り込む。これ以後 Lottario 夫妻は、一応王として扱われながらも、一種の人質に変わる。父の Ugo 王は莫大な宝を抱え、パヴィーアを Berengario II に明け渡してプロヴァンスに戻る。ムラトリーは「これまでに彼が犯した少なからぬ悪事、専制的な支配、人民を苦しめた貪欲、イタリア人を信用せずその報いとしてイタリア人から全然信用されなかったこと、外人にのみ地位を与えて楽々と昇進させたことが、王位から転落した原因であった (V.XII, p.454)」と Ugo の失脚を説明している。Berengario II はイタリアの実権を握り、Uberto はトスカーナ以外の領地を失い、Bonifazio と Teobaldo 父子がスポレートとカメリーノを支配している。947 年にプロヴァンスで Ugo が死に、Berengario の監督を受けていた Lottario も、950 年には急死して毒殺の噂が流れる。その後24日間の空白の後、パヴィーアで諸侯が Berengario II と Adalberto の父子をイタリア王に選出した。しかし善良な Lottario 毒殺

の噂に加えて、その未亡人 Adelaide に与えた待遇が、一挙にこの王の人気を落とすこととなった。Adelaide は 947 年に 16 才で Lottario と結婚し、将来フランス王妃となる Emma をもうけていたので、この 951 年には 20 才で才色兼備の未亡人だったが、新イタリア王 Berengario は、もしも彼女が誰か有力者と結婚するとその相手に権威が備わり、自分の地位が危なくなれることを憂慮して、彼女をガルダ湖畔の砦の牢獄の中に幽閉した。その噂は一挙にイタリアとドイツに広まった。この事件の責任の一部は、前王妃 Adelaide の宝石や衣装を奪った王妃 Willa にもあったといわれ、案外宮廷における女性同士の嫉妬が原因だったようにも考えられるが、Martino という神父が牢獄の壁に穴を開けて Adelaide の脱出の手引きをし、その後彼女は漁夫の小舟に乗せてもらい、魚を分けてもらって飢えを凌ぐなどの逃避行の後、レッジョ司教の Adelardo の仲介により、カノッサの領主で Matilde 女伯の先祖にあたる Alberto Azzo によって堅固なカノッサ城に保護された。この領主は直ちにドイツ王 Ottone に連絡して保護を求め、5～6 年以前に王妃 Editta を失っていたドイツ王は、イタリア征服の好機と見てまず息子 Lodolfo (別の綴りでは Litolfo) をイタリアに送るが、イタリアの都市は彼を容易に受け入れず、Ottone 自ら一応ローマ参詣という名目で恐らく強力な軍隊を率いて突然南下し、すでに Berengario II が明け渡していたらしいパヴィーアに到着した。彼は前イタリア王妃に求婚して受け入れられ、パヴィーアで結婚、952 年 9 月下旬には結婚していたという。しかしこの当時の Ottone はまだ Berengario を討つ余裕がなく、出頭して来た Berengario と平和裡に妥協をはかって帰国している。

翌 953 年には Ottone の長子 Lodolfo とその一党が Ottone に反逆して、ドイツは内乱に巻き込まれる。Ottone がドイツに釘付けされている間に Berengario は憎い Alberto Azzo 攻撃に着手したが、カノッサ城が堅固なため頑強な抵抗に会い、Berengario はかえって面目を潰す。この頃ミラノでは大司教の地位を巡って二人の候補者とその党派が争い、コムーネ時代の到来を予告している。955 年 Adelaide は後の皇帝 Ottone II を産む。Ottone は内乱に苦しみつつも侵入したハンガリア人やスラブ人を討ったので、その威信が高まり、Berengario 討伐の準備が進んだ。まず反乱を許して和解したばかりの息子 Lodolfo を再びイタリアに送る。彼の軍の到来でカノッサ包囲軍は逃げ去るが、Lodolfo もイタリアで急死してしまう。その死因には、戦死説、ムラトリーがより信用出来るとする熱病説、はては毒殺説等各説があるといわれる。Berengario は彼の死去のおかげで一息つけたが、961 年には Ottone 自らイタリアに南下した。Berengario の庄政とその妃 Willa の貪欲とで、彼の支配を憎んでいたイタリア人は Ottone を歓迎し、パヴィーアの門は開かれていた。ミラノでイタリア王の戴冠式を挙行。翌 962 年にはローマで Giovanni XII によって戴冠されて皇帝となる。こうして一応いわれるイタリア王国時代に終止符が打たれた。Alberto Azzo は無事城を守ってレッジョおよびモデナ伯の地位を得 (V.XIII, p.57 と p.81)、Berengario はウンブリアのモンテフェルトロのサン・レーオ砦に籠る。オルタ湖 (ピエモンテ) のサン・ジュリオ島に逃れた王妃は先につかまるが、皇帝に釈放され夫の許に走る。

964年にはサン・レーオ砦が落城して、夫妻は捕虜となり、息子等と共にドイツのバンベルク牢獄に繋がれ、夫は966年に他界、王妃は修道院に入る。二人の息子AdalbertoとCurradoは釈放され、娘達も宮廷に出入りしたが、息子達は後に東ローマの宮廷へ亡命した。他方ローマでは、厳しすぎるOttoneに反抗して市民が反乱を起こしたり、法王と皇帝との不和が生じるなど、Ottoneの統治も必ずしも順風満帆でも感謝されていたわけでもなかったらしい。

しかしAdelaideの救出とローマ帝国の再建という美名と共に、ドイツ系の皇帝によるイタリア支配を復活させたこの皇帝の権威は、その後の法王領支配の裏付けと拡大のために大いに利用されることとなり、多くの年代記作者によって、この皇帝が法王庁に認めた特権が記録された。それらを列挙した後、ムラトリーは「反論するに値しない、後世の明白な欺瞞(p.78)」だと断定する。しかしBertelliが指摘している通り¹¹⁾、すでにOttoneの962年の特許状については、その年代の記し方を始め、寄進されたとされる領地がヴェネツィアを始め、実際に法王領ではなかった地方が多い事等、後世の偽作の疑いが濃いことや、写しに金文字を用いるなど原本に偽装しようとする意図が明白であることが、コマッキオ論争¹²⁾を通して十分に論じられていたのである。そこでBertelliは、「あらゆる点で穏健化し用心のために他ならぬFleuryの『歴史』を引き合いに出しているにもかかわらず、『イタリア年代記』は本質において、コマッキオの谷間に関する外交論争の時代に採用した以前の立場を捨てていない。それどころかそれを再び取り上げて、再論しているのだ¹³⁾」と見なし、「ムラトリーの態度は『年代記』で反教権主義のモチーフを繰り返すが、おそらくそれは8世紀から10世紀にかけての唯一の際立った音調となった¹⁴⁾」と記している。

皇帝Ottoneは自分の戴冠式に加わった法王Giovanni XIIを罷免し、Leone VIIIを選出させるが、その後ローマを訪ねた時ローマ人の反乱に会い辛うじて市外に退去している。前法王の巻き返しでLeoneは退位させられたが、Giovanniが急死して、Benedetto Vが選ばれ、彼は皇帝方に捕われてGiovanni XIIIと交替させられ、死ぬまでドイツで監禁された。Ottoneの皇帝即位後わずか5年以内にこれほどの変動が生じているのだ。967年にはそれまでドイツで父の代役をしていたOttoneとAdelaideの子、Ottone IIがイタリアに来た。972年にはすでに父の同僚として帝位について足掛け6年目に入っていたOttone IIが、一時東ローマ皇帝の位にあったRomanoの娘Teofaniaと結婚した。この10世紀の後半からエステ家の確実な先祖の動きが明らかになり始めている。

973年にはOttone Iが脳溢血もしくは他の急性の病気で死去した。ムラトリーは彼に対して「蛮人の敵だったこの君主は、戦における大事業、宗教への愛とその普及、正義への情熱、その他の輝かしい美德等のために、正当にもシャルルマーニュに続いて偉大という称号が与えられた(V.XIII, p.153)」という賛辞を呈した。Berengario I等に較べるとやや冷淡な印象は否めない。その子Ottone IIはこの年再び戴冠式を行い地位を確認した。その信仰厚き一族、特に母や叔父に関してムラトリーは、より雄弁を振るっている。Ottone IIは意外に活動的で、ドイツのみな

らず、デンマークやフランスにも攻め込んでいる。980年に法王に招かれて、ドイツからイタリアに来る。同じ年 Teofania が Ottone III を産む。Ottone II は寄進好きの母親 Adelaide と一時対立するが、後に謝罪している。982年皇帝はカラブリアで回教徒と海戦して苦戦。983年 Ottone は復讐戦を準備、さらにヴェネツィア攻撃も企てていたと伝えられる。ムラトリーはこの時代の記録の頼りなさを嘆く。同じ年、精神的苦悩のため、あるいは負傷の手当を良くしなかったために Ottone II が死去した。ある著者が彼を「野心は大きく、知恵は小さい (p.215)」と評したとされている。Ottone III はまだ幼く、バヴァリア公 Arrigo II が勢力を取り戻す。またこの時の法王 Giovanni XIV はかつて追放した敵 Bonifazio のため監禁されて飢え死にしたか、毒殺されたとされる。Bonifazio は前法王の遺体を公開し自ら法王と名乗るが、4か月で事故死し、死体は道路に引き回されて法王とは認められなかった。987年フランスでも、若年の Lodovico V が嗣子なしで死に、後見人 Ugo Capeto のカペー朝が始まる。989年頃 Ottone の母親 Teofania が一度はイタリアに来るが、息子の後見するためにドイツに戻り、早くも991年には病死した。ムラトリーはこの前皇后を、「このギリシャの姫君は、男性的な精神の持主で、美しく正直な話し手だった。貧民や教会に対する慈悲の気持ちもとても強く、望む相手の好意を得る術と同時に、高慢になり過ぎた者を押さえ付ける術も心得ていた。だから息子の統治にとって極めて有益だった (V.XIII, p.248)」と評価している。ただし彼女にも一つだけ欠点があって、それは姑の皇太后 Adelaide と犬猿の仲だったことだとされている。このため Adelaide は一時期イタリアに去り、この嫁姑戦争は勝負あったかに見えたが、予想に反して、Adelaideの方が生き残り、再びドイツに戻って孫の後見した。この当時ミラノでは父親が金で皇帝 Ottone I からその地位を買ったとされる、Landolfo 大司教の統治を巡って激しい反乱が生じており、クレモナーでも類似の事態が生じていて、いよいよ市民達の権利が主張されるコムネ時代の到来を予感させる。

996年に、980年生まれの Ottone III がドイツからローマに来て、5月31日に戴冠式を挙げて帝位につく。この皇帝のイタリア南下に関してもモデナで皇后 Berta が同地の伯に恋したため、皇帝が同伯を斬首したなどという奇妙な記録が残されているという。(p.276-7) 当時法王庁もいくつかの都市も混乱し、皇帝は何度もドイツとイタリアを往復して、各地で会議を開催した。1000年には祖母 Adelaide が死去、彼の有力な三本柱、Adelaide、法王 Gregorio V、修道院長の叔母 Matilda を全部失ったという。たまたま皇帝は Aquisgrana すなわちアーヘンで Carlomagno の墓があると知り、床を掘って部屋に入り、金の十字架と衣服の一部を取ると、Carlomagno が現れて Ottone が世継ぎを得ずに死ぬと告げたという。皇帝はベネヴェントやティヴォリ等を攻撃したという説もある。やがてローマ市民の間で反皇帝の陰謀が進み、ティヴォリを許して滞在中の皇帝に反乱を起こしたが、ムラトリーは結局両者が和解したと見なす。法王 Silvestro II とスポレートに向かう途中、皇帝は急死した。ドイツでも反皇帝陰謀が進み四面楚歌に近い状態だったらしい。ムラトリーは没年を今日の説と同じ1002年とし、発疹チフスの点

状出血の熱によるとする説と、ローマの有力者の夫を斬首されて皇帝の妾にされた貴夫人 Stefania による毒殺説を併記している。ただし後者は作り話だと否定的だ。ムラトリーは、女性達の後見で育ち夭折した割には奇怪な伝説に満ちたこの若い皇帝について、「そのいとも高貴なる気質、精神と知識における素晴らしい素質について、ドイツの古い歴史家達は飽きずに語り続ける (V.XIII, p.327)」と短いが結構高い評価を与えている。ムラトリーには明らかに夭折君主好みがあるようだ。

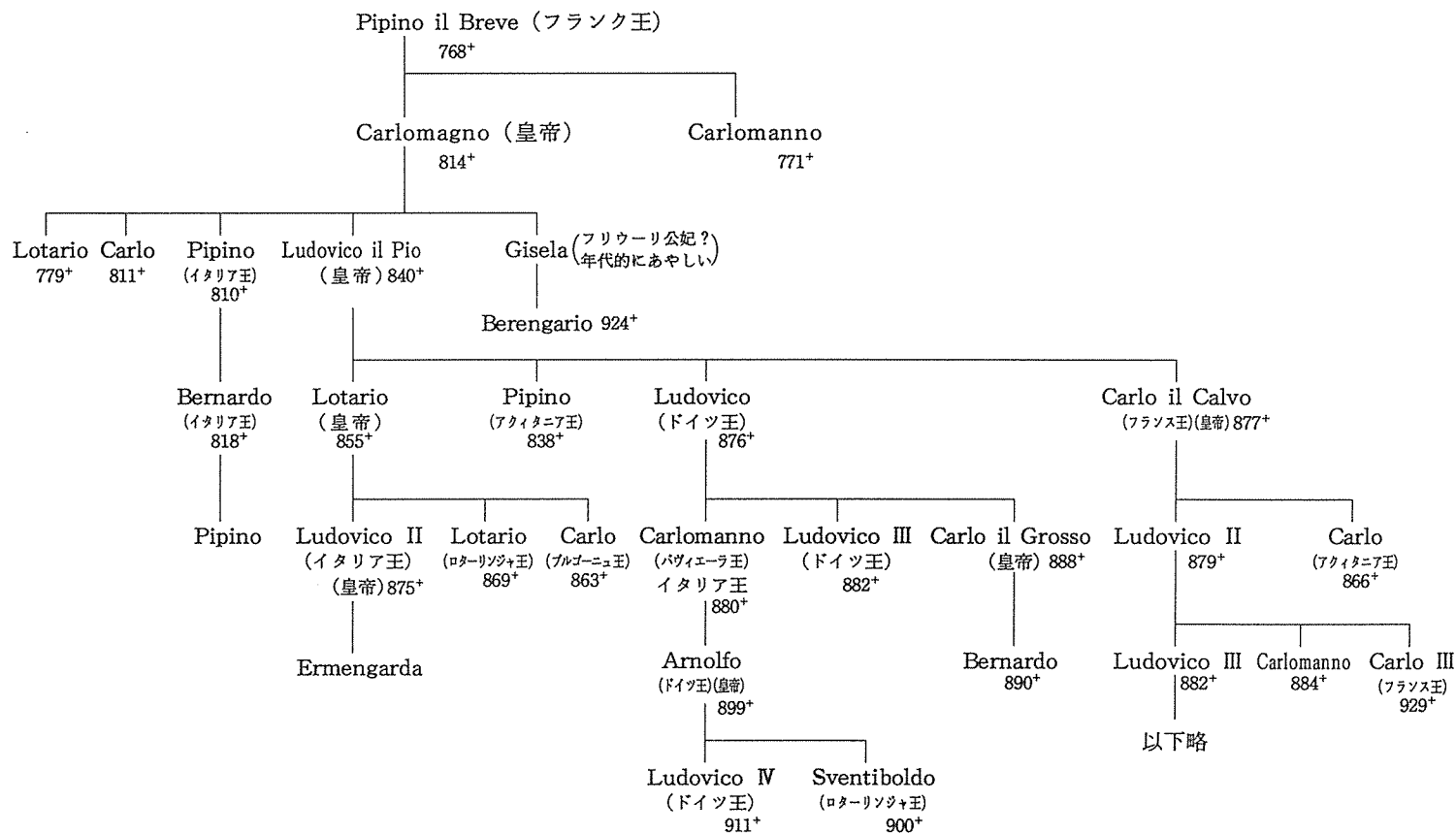
こうして若い皇帝を失ったドイツでは、前述の Arrigo II の他に Ecchicardo、Ottone 等有力候補の争いが続くが、その隙にイタリアの一部の領主達がローディに集まり、ムラトリーが「目の利くことと勇氣において多数に勝るがキリスト教徒としての美德においてはそうではない (V.XIII, p.330)」と批評した、ピエモンテの Ivrea 侯 Ardoino がイタリア王に選出されている。その後は結局これまでに繰り返して見たとおり、ドイツ王の南下と戴冠、イタリア王の抵抗が繰り返され、ドイツ王 Arrigo (ハインリッヒ) II の皇帝就任という経過をたどり、それなりに興味深いエピソードも見られるが、紙数の都合でこのあたりで打ち切ることにする。

注

- 1) A cura di G.Falco e F.Forti, *OPERE DI LODOVICO ANTONIO MURATORI*, (Tomo I, VII LE OPERE CONCLUSIVE, *ANNALI D'ITALIA*, Milano-Napoli 1964, pp.1203-1216.
- 2) Id., pp.1145-79
- 3) *OPERE DEL MURATORI*, XXVII-XXVIII, *ANNALI D'ITALIA*, TOMO XII-XIII.
- 4) 以下の注ぬきの引用はすべて注3)の文献からのものである。出典は本文中に記す。
- 5) *ENCICLOPEDIA ITALIANA*, V.IX, Roma 1949, p.118.年代的に無理。ムラトリーは注3)の書の V.XXVI, T.XI (本稿ではV.XI), p.454 に Lodovico II の子孫の小さな系図を掲載して、Gisela を Lodovico II の末娘としている。それだと有り得る。
- 6) 今日の定説とは Bernardino Barbadoro, *VENTISETTE SECOLI DI STORIA D'ITALIA*, Firenze 1972, の付録の年表その他。
- 7) V.XII, pp.235-237, id.pp, 250-255.
- 8) この戦いの最も古い記録は恐らく、G.Villani, L.VII, Cap.XXVII だと思われる。*CRONICA DI GIOVANNI VILLANI*, Firenze 1823, (Roma 1980), T.II, pp.184-188.
- 9) V.XII, p.364. ムラトリーは敵方のでっち上げだとする。
- 10) V.XII, p.381.教会の批判者だったムラトリーは中世の教会乱脈に対しては、大体一貫して弁護者となっている。スキャンダルの次元での攻撃を避けているようであるが、実際に乱脈がなかったのかとなると、やはり疑問の余地がある。
- 11) Sergio Bertelli, *ERUDIZIONE E STORIA IN LUDOVICO ANTONIO MURATORI*, Napoli 1960, pp.440-441.
- 12) 拙稿、コマッキオ論争とムラトリーの方法、『大阪外国語大学学报』第74-3号所収、大阪 1987参照。
- 13) S.Bertelli, op.cit., p.440.
- 14) Id., pp.441-2.

(1993. 9. 30 受理)

系図 1 (Enciclopedia Italiana より部分のみ)



系図 2 (ムラトリー作成『イタリア年代記』所収)
(ただし年長順に並び換えた)

